文月

〔ふみづき〕令和８年７月

旧暦では秋と言われておりましたので、夜が長くなるから読書に適しているという意味があります。

発行：北海道神社庁一区教化委員会

吾が日本は種子を生じ、震旦は枝葉を現し、天竺は花実を開く、故に仏法は万法の花実たり、儒教は万法の枝葉たり、神道は万法の根本たり

～ 吉田兼倶・唯一神道名法要集 ～

今月のことば

吾が日本は種子を生じ、震旦は枝葉を現し、天竺は花実を開く、故に仏法は万法の花実たり、儒教は万法の枝葉たり、神道は万法の根本たり

―― 吉田兼倶・唯一神道名法要集 ――

日本の文化には、古く日本の伝統文化のあったところに、中国（志那）文化・印度文化の二つが混在し、或るときは融和し、或るときは、互に優劣を競つて来た。ここに掲げた言葉は、右の双方をまとめて述べたものである。日本の国に於ては、神道が最も古く根を下ろしてゐるので、一本の樹木に例へれば、種子や根を大地に下ろしたやうなのである。そこに入つて来たのが中国（志那）の儒教で、これは例へていへば、神道といふ種子、根幹の上に、枝となり葉となつて茂つたやうなものである。印度の仏教は、更にその後、日本に入つて来たもので、神道の根、幹、儒教の枝、葉の上に咲いた花であり、そこに出来た実のやうなものである。

世間では花は観賞され、実は食べておいしいといふので、世間的には印度の仏教が反映しているが、その根本を尋ねると、花が咲くためには枝葉（儒教）があり、枝葉をだせるためには根や幹が（神道）がしつかりしてなければ、その結果を齎すことは出来ない。

根は地下に隠れ、幹もすぐには観賞の対象にならないが、日本文化史上に於ける神道、儒教、仏教の三教を比較してみると、その根本に神道のあること、そして儒教も仏教も、その上、育成され、今日に生きつづけて来られたことを、よく考ふべきであるとしたものである

（神道百言　一般財団法人神道文化会編より抜粋）

季節のまつり

七夕

七月七日
日本と中国の伝説の合作

七月七日は「七夕（しちせき）」の節供といわれ、日本に古くから伝わる棚織津女（たなばたつめ）《年に一度水辺のはた屋で神様の訪れを待ち、神様とともに一夜を過ごす聖なる乙女》の信仰と中国の牽牛（けんぎゅう）と織女（しょくじょ）の星伝説とが結び付いた行事です。江戸時代には、手習い（習字）が上手になるようにとの願いから寺子屋などでさかんに行なわれ、願い事を短冊に書き、笹竹に結びつけて七夕祭りをしました。

中元

七月十五日
本来は、祖先・両親への感謝の祭り

お中元とは、中元（旧暦七月十五日）の時期に行なう贈答を言います。古くから中元には、先祖の霊と両親などの生身魂（いきみたま）を祭る行事があり、この日は嫁いだ娘や分家した息子たちが帰ってきて祖先に感謝し、両親に魚などを贈るという習慣がありました。江戸時代になると商業が発達し、当時の商取引では盆と大晦日に集金していましたので、この時期になると商人は、顧客にお礼の品を配りました。それが一般の人にも広がって、日頃お世話になっている人への夏の挨拶として、品物を贈る習慣が定着しました。

何気なく使っている「数」「七」に込められた意味とは？

洋の東西を問わず、「七」は聖なる数として考えられてきました。西洋では旧約聖書の創世記に神が六日間で天地を創造し、七日目を安息日として聖なる日と定めました。東洋でも農作業の時期を計るための天文学が発達し、北極星と北斗七星を季節を知る指標としていました。また、月の運行は七日ごとに様相を変えていきます。細い三日月が七日たつと半月形の上弦の月となり、また七日たつと満月になります。さらに七日たつと下弦の月となり、それから七日で真っ暗な新月となります。古代の人々は、この月の変化を時をとらえる尺度とし、暦の基準としました。

そこから「七」は特別な数字と考えられるようになり、生後七日目にお七夜の誕生祝を行ったり、法要も七日を単位として行うようになりました。さらに「七福神」「七賢人」など、個性あるものをまとめる数詞としても使われています。

電光影裏（でんこうえいり）

人生は束の間であるが、人生を悟った者は永久に滅びることがなく、存在するというたとえ。

参考文献
『くらしと祭り百話』小野迪夫（神社新報社）
『日本人数のしきたり』飯倉晴武（青春出版社）

令和 8 年
2026年

7 月

日	月	火	水	木	金	土
			1 先負 ね	2 仏滅 半夏生 うし	3 大安 三りんぼう とら	4 赤口 う
5 先勝 たつ	6 友引 一粒万倍日 み	7 先負 小暑 七夕 一粒万倍日 三りんぼう うま	8 仏滅 ひつじ	9 大安 さる	10 赤口 一粒万倍日 とり	11 先勝 いぬ
12 友引 る	13 先負 ね	14 赤口 うし	15 先勝 とら	16 友引 う	17 先負 たつ	18 仏滅 み
19 大安 一粒万倍日 三りんぼう うま	20 赤口 海の日 土用 ひつじ	21 先勝 さる	22 友引 一粒万倍日 とり	23 先負 大暑 いぬ	24 仏滅 る	25 大安 ね
26 赤口 土用の丑 うし	27 先勝 とら	28 友引 う	29 先負 たつ	30 仏滅 明治天皇祭 み	31 大安 一粒万倍日 三りんぼう うま	

二十四節気

【小暑　しょうしょ】… 七日

旧暦六月末の月の正節で、夏至を境に日脚は徐々につまってきていますが、暑さは日増しに加わってきます。

【大暑　たいしょ】… 二十三日

旧暦六月末の月の中気で、このころは暑さもますます加わり、酷暑にさいなまれます。夏の土用はこの節気に入ります。

六曜・選日

《六曜》
【先勝】…諸事急ぐことによし、午後よりわるし
【友引】…朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む
【先負】…諸事静かなることによし、午後大吉
【仏滅】…万事凶、患えば長びくおそれあり
【大安】…何事をするのにも吉の日、大吉日
【赤口】…諸事油断すべからず、正午のみ吉

《選日の吉凶》
【三りんぼう】…三隣亡日、普請始め、棟上大凶日
【一粒万倍日】…出資・投資・購入、新規事業開始
婚姻は吉、借りる、離別は凶

七十二候《7月》

小暑
- 初候・温風至（あつかぜいたる）
  注ぐ陽がだんだんと強くなる
- 次候・蓮始開（はすはじめてひらく）
  蓮がゆっくりと花を咲かす
- 末候・鷹乃学習（たかすなわちわざをならう）
  雛が巣立ちの準備をする

大暑
- 初候・桐始結花（きりはじめてはなをむすぶ）
  桐が花を咲かせる
- 次候・土潤溽暑（つちうるおうてむしあつし）
  熱気がまとわりつく蒸し暑い
- 末候・大雨時行（たいうときどきふる）
  夕立や台風などの夏の雨が激しく降る

※七十二候とは二十四節気の各節気をさらに3つの候に細分し、一年を七十二に分けたものをいいます。季節の移ろいを気象や動植物の成長・行動などに託して表現したものです。

「土用の丑の日」なぜウナギを食べるの？

土用とは、本来は二十四節気の立春、立夏、立秋、立冬の前の約十八日間をよびますが、一般的には立秋前の十八日間の土用をさします。

一年のなかでもとりわけ暑い時期のため、江戸時代には、この間の丑の日（今年は七月二十八日）をとくに、「土用の丑の日」と重視し、この日に薬草を入れた風呂に入ったり、お灸をすえたりすると、夏バテや病気回復などに効き目があるとされていました。また、丑の日にちなんで「ウ」のつくもの、例えばウリ、ウナギ、ウシ、梅干しなどを食べると身体によいとも信じられていました。

現在のように土用の丑の日に、とりわけウナギを食べる習慣は、江戸時代の蘭学者であった平賀源内が、夏枯れで困っているウナギ屋の宣伝策の一環として広めたといわれています。

安産祈願　7月の戌（いぬ）の日

11日（土）
23日（木）

＊戌の日以外でも安産祈願のご奉仕をしております。神社にお問い合わせください。

《 20日　海の日 》

海の恩恵に感謝するとともに、海洋国日本の繁栄を願う日です。

祝祭日には国旗を掲げましょう